

ジャーナリスト

# 田原総一郎さん

今月号のインタビューは、報道番組でおなじみの田原総一郎さんです。田原さんといえば、『朝まで生テレビ!』の司会者としての顔を思い浮かべる方も多いかと思います。しかし、田原さんを象徴するものは、司会者の顔のみならず、ジャーナリストとしての熱い情熱です。インタビューでは、田原さんの鋭い分析と深い取材力のルーツをお話ししてもらうとともに、現在の日本が抱える問題、これからの日本が直面する問題について語っていただきました。

(聞き手・構成：西岡 毅，岩崎孝太郎)



—— 始めからマスコミの世界へ入ろうと思われていたのですか。

僕はね、元々は小説家になりたかったんですよ。それで同人雑誌に色々書いたりしたんだけど、誰にもほめられない。そろそろ駄目かなと思っていた頃、日本橋にある本屋でね、石原慎太郎さんの『太陽の季節』を立ち読みして、大江健三郎さんの本も読んで、これはもうだめだ、参ったと思った。石原さんの小説には、非常に生々しい現実が描かれていた。大江健三郎さんの本は、当時のフランス文学を翻訳したような調子で書いてあった。これにはかなわないと思いましたね。今から見るとそんなに大したことはないかもしれないけど (笑)。

—— 小説家をあきらめた後、マスコミの世界を選ばれたのはどのような理由からでしょうか。

私がマスコミに入ったのは、私が小学校5年生の夏休みに、日本が戦争に負けたことが大きいんです。小学校では、一学期には聖戦、正義の戦争と教えていた。アジアを解放する戦争だ、と。それが、夏休みに戦争が終わって、二学期になると、間違った戦争、侵略戦争と言われるようになって、どうも世の中の人

の言うことが信用できないと思った。そういう気持ちがあって、世の中の常識、それを自分で探っていく、そういう仕事がしたいという気持ちがあった。あとは、私の家系は、近江商人の末裔なんですけど、それに対する反発もあって、メーカー、銀行や商社はないと思っていました。それでマスコミの世界に入りました。

—— 田原さんは、長い間、マスコミとして過激な番組をされてきました。

過激と言うか、やるべきことという意識でいましたけど、マスコミに入った当初からドキュメンタリーをずっとやってきました。カメラマンと2人でロケに行くと、NHKやTBSなんかの大手は、沢山のスタッフと大型ワゴンで来て、10倍くらい潤沢な制作費をかけて番組を作るわけです。それに対抗するために、こちらは少ない予算で、彼らができない番組。つまり、やばい番組 (笑)。

今でもそういう番組はやっていますよ。先日、「朝まで生テレビ!」というテレビ番組で暴力団の元組長を呼んで対談をやったんです。暴力団のことは、民暴についてやったんですが、これは他のテレビ局ではなかなかできないでしょう。暴力団を必要悪とは言

わないけど、なくならないと思う。暴力団がいない国はほとんどないわけですよ。北朝鮮くらいじゃないかな。暴力団は、それくらい世の中に浸透している存在なんです。その彼らを全て排除するというのなら、暴力団員の就職問題をどう考えるか。こういう現実的な問題にも向き合わないといけない。

——「朝まで生テレビ！」では、長年、生放送の司会を担当されていますが、大変ではないですか。

全然大変じゃないですよ。討論というのは、出演者が言いたいことを言えるというのが大前提だと思っています。私としては、その環境作りをするだけです。あの短い時間で、結論が出るはずはないですから。

時々、出演者の発言を止めるときもありますけど、それは、二つの場合だけです。一つは、発言者が本音を言わないとき。わざと隠してるのが見えるわけです。もう一つは、緊張のために本当のことを言えていないというとき。要するに、フェアにやりたいということです。

——「朝まで生テレビ！」では、2011年3月11日の東日本大震災に関するテーマも度々採り上げられています。東日本大震災は、現代の日本が体験したことのない規模の震災だと思いますが、日本は立ち直れますか。

もちろんです。日本はこれから絶対に立ち直れますよ。立ち直るしかない。

この震災では、日本は2つの大きな問題に直面しました。一つ目は、地震、津波の問題。約20兆円にものぼる被害。

そして、本当に大きいのが二つ目の原発の問題です。日本で、こんなに大きな原発の事故は初めてなんです。この事故を契機に、原発とは何かを考えないといけない。

なぜ事故が起きたのか？　そもそも原子力は人類が制御できないものなのか？　それとも管理ミスなのか？　私は、管理ミスだと思っていますけどね。

——田原さんは、『原子力戦争』という本も執筆されていますし、ドキュメントの『東京電力企画室原発』という番組も制作されています。田原さんは、原発について反対派でしょうか、推進派でしょうか。

どちらかというとなかなか、僕は脱原発ではない。今の日本人はおそらく7割が脱原発です。だけど、本当に脱原発でいけるのかは考えないといけない。原発を止めた場合、自然エネルギーの太陽、風力、水力でいくのか。日本では具体的な答えはまだ出ていない。

菅政権下で、2030年の電力問題について、閣議決定、政府決定もしているんです。そこでは、化石燃料26%、原発で53%、火力・水力等の自然エネルギー21%で行くということになってる。もし脱原発するというのなら、この原発の53%をどうまかなうか。今、自然エネルギーがもてはやされているんですけど、現在は、自然エネルギーが10%だけなんです。具体的にどうするのか。

さらに、原発の問題の中では、使用済みの核燃料をどう処理するかという「バックエンド」の問題が重要です。残念ながら、中間処理のための六ヶ所村は機能していない。最終処理をどうするかはまだ誰も見当がついていない。この「バックエンド」の問題は、まだ世界のどこでも結論が出ていない。

——原発は、風評被害の問題も引き起こしています。

日本国内にとどまらず、世界的な風評被害になっていますよ。私は、震災の後、3回福島県を訪問して取材していますが、福島の農家の方々は本当にがんばっている。それなのに、政府も東電も事実を隠そう、隠そうとしている。これが大問題なんです。それが風評被害を拡大させているんですよ。政府や東電は、原発のことを全て明らかにするべきですよ。例えば、セシウムがどうなっているか、全部を明らかにするしかない。

マスコミに入ったのは、小学5年生の夏休みに日本が戦争に負けたことが大きい。どうも世の中の人の言うことが信用できない、世の中の常識を自分で探っていく、そういう仕事がしたいという気持ちがあった。

田原 総一郎

——話は変わりますが、田原さんは検察についても色々な著書をお書きになっています。近年では、大阪地検特捜部の前田検事の証拠改ざん事件が起きました。

検察の中で、社会を正しく清らかにしたい、そのために悪いやつをやっつけるという風潮になっていますが、検察の正義がちょっとやりすぎになっている。これは検察の体質の問題です。検察の正義が単なる正義を超えて、積極的正義とでも言うべきものになっています。

田中角栄氏にしてもライブドアの堀江貴文氏、リクルートの江副浩正さんにしても、はじめからやっつけようという意識が強すぎるために、検察が起訴に都合が良いようなシナリオを作りすぎるんです。

——裁判所の責任も大きいとお考えでしょうか。

もちろん大きいですよ。例えば、足利事件なんて裁判所が何度も有罪にしているんだから。

いわゆる陸山会事件では、民主党の小沢一郎氏の元秘書3人が東京地裁で有罪になったけど、あれは、追認、追認の積み重ねで、物的証拠がないのに有罪にしたわけですよ。そんなことが許されるのか。

我が国では、あまり裁判所の問題を追及するということはしないけれども、それはおかしい。

——検察審査会や裁判員裁判といった国民の司法参加についてはどのようなご意見をお持ちでしょうか。

国民の司法参加自体は良いと思いますよ。

でも、検察審査会は全て非公開でしょう。ここは一つ問題です。内部で何が行われているか、全く見

えてこない。全てを公開とは言わないけど、なぜ起訴相当になったかくらいは公開していいのではないかと思いますよ。

裁判員裁判も良いと思う。ただ、理念としては良いけど、理念と実態との乖離の問題は残る。そのため、実態の問題点で直すべきところは直していくべきでしょう。

——弁護士会、弁護士に向けて何か一言いただけますか。

世の中は人治国家から法治国家へ変わっていかねばいけません。それをするのが弁護士会、弁護士の役割なんじゃないかと思います。期待していますよ。

——最後になりますが、オンオフの切替え方法、オフの過ごし方について教えて下さい。

私にはオフはないですよ、基本的に。ずっとオンの状態です（笑）。

——本日はありがとうございました。

## プロフィール たはら・そういちろう

1934年4月15日生まれ。滋賀県出身。1960年、岩波映画製作所入社。1964年、東京12チャンネル（現テレビ東京）入社。1977年よりフリージャーナリストに。『朝まで生テレビ!』（テレビ朝日系）の司会をはじめ、テレビ・ラジオに多数出演。早稲田大学特命教授として大学院で講義をするほか、『大隈塾』塾頭も務める。著書に、『日本の戦争』（小学館）、『誰も書かなかった日本の戦争』（ポプラ社）、『日本人は原発とどうつきあうべきか』（PHP研究所）、その他多数。